

# スピリチズム論争と70年代ロシア社会

— 迷信と科学をめぐる —

大 矢 温

たくさんだ。自然科学から神秘主義にいたる最も確実な道  
がどれであるかは、ここでは手にとるように示されている。

—エンゲルス<sup>(1)</sup>

## はじめに：近代スピリチズムとロシア社会

ソ連崩壊を目前に控えた1991年12月のある晩のことである。当時政治的にも経済的にも混乱が続く中、研究テーマの検閲関係の資料調査のためにモスクワでホームステイをしていた私は、家主夫婦に「マグネチズムの降霊会」に誘われた。何でも、ある日突然、親戚の一人が霊媒であることが判明した、というのだ。連れて行かれた「降霊会」の会場は、何の変哲もない典型的なフルシシヨプカ（フルシチョフ時代の粗製濫造住宅）の一室で、すでに数人が「降霊会」が始まるのを待っていた。その場の誰もが心霊現象が見られる、という期待で興奮しきっている。テーブルの上にはスプーンやフォーク、そしてフライパンやアイロンといった金属製の家庭用品が並んでいる。やがて「霊媒」となった婦人が入室して、「降霊会」の開始を宣言する。するとこともあろうに、その場の全員が先を争って服を脱ぎだしたのだ。私もまた、その場の空気を察して見知らぬ男女に混じって下着一枚になった。他方「霊媒」は、その場の一人一人の腹や胸の上に「磁気化」したスプーンやフォークを貼り付けて（というよりは単に肥満した脂肪の上に置くわけだが）いく。彼らにとっての興味は、もちろんオカルトがかかった儀式やアニマル・マグネチズムの教説などにあるのではなく、眼前の不思議な吸着現象にあったのだ。窓の外の寒気も、激動の政治

状況もここでは関係ない。不思議な興奮状態で半裸の男女が「マグネチズム」に熱中する中でモスクワの冬の夜が更けていったのだった。

さて、本論で対象にするのは、これより 100 年以上も前のこと、19 世紀後半にロシア社会を席卷した、「スピリチズム」と呼ばれる超能力の流行現象である。一般に「スピリチズム」と呼ばれる思想は、1. 霊の存在を前提として、2. 霊の力によって物理世界が影響を受けるという確信、以上二点の要素から成っている。ここから通常自然科学で説明できない現象を霊の力によるものと説明すること全般をも「スピリチズム」と呼ぶ用法が派生しているわけである<sup>(2)</sup>。

したがって、たとえばシャーマンによる呪術や日本のイタコによる「口寄せ」なども広義のスピリチズムの範疇にはいる。ただし、本稿では、これらの伝統的スピリチズムとは一線を画して、世界的にスピリチズムが流行した 19 世紀後半の社会現象を、より狭い意味で「近代スピリチズム」として、分析の対象にする<sup>(3)</sup>。この「近代スピリチズム」の特徴は、肉体の死後も霊の世界で生きながらえている霊と、叩音(ラップ音)やテーブルの回転などの物理的な現象によって交信する、というふれこみで、多くの場合、降霊会 (séance) において、霊媒 (medium) を介して行われた点にある。

また、その起源が明らかになっている点も近代スピリチズムの特質である。近代スピリチズムは、1848 年にアメリカのニューヨーク州でフォックス家の姉妹ケイトとマーガレットが寝室で不思議な叩音を聞いたことに端を発している。この叩音を霊界からのものと確信した姉妹は、叩音が 1 回なら "Yes"、2 回なら "No"、という具合に霊と取り決めをした上で霊に質問し、それに対して霊が叩音で答える、という方法で霊界と交信することに成功したと主張した。この「発見」はたちまち全米中の話題となり、多くの人々がフォックス姉妹にならって霊界との交信を試み、なかには実際に交信に成功したと主張するものも現れて、評判は輪をかけて広がったと伝えられている<sup>(4)</sup>。

このようにして霊界との交信をする能力があると見なされた人々は「霊媒」と呼ばれ、ほどなく観客の前で降霊会を催すようになる。フォックス姉妹の「発

見」から1年後にはすでに全米で1万人以上の霊媒が発見されたという<sup>(5)</sup>。この数字からも近代スピリチズムが急速に拡大したことが読みとれるが、また同時に、近代スピリチズムの流行に伴って、従来の叩音による交信方法に代わって、テーブルの回転や傾きによって諾否を伝えるといった新たな交信方法（「テーブル・ターニング」と呼ばれた）を発明する者が出たり、あるいは「プランシェット」や「ダイヤル・プレート」、さらには「ウィジャー・ボード」といった交信のための特別の器具を開発して素人にも気軽に霊界と交信できるよう工夫する者が出るようになった。近代スピリチズムは一方で職業的な霊媒による専門技芸として高度化すると同時に、また他方では家庭内で楽しめるテーブル・ゲームとして大衆化したのであった<sup>(6)</sup>。

このような全米を巻き込んだ近代スピリチズムはたちまちのうちに、開国間もない日本や大改革を控えたロシアを含む、全世界に伝播した。難破したアメリカ船の船員から伝えられたテーブル・ターニングは、日本では狐の霊として解釈され、「コックリさん」として定着したし、またロシアではツァーリ自ら近代スピリチズムに熱中したのであった。

ロシアにおける近代スピリチズムの流行に関しては、たとえばアレクサンドル二世がダニエル・ヒュームという霊媒を宮廷内に招いて近代スピリチズムに熱中した様子を、ツァーリ一家の養育女官だったアンナ・チュッチェフの日記から知ることができる<sup>(7)</sup>。また、トルストイは近代スピリチズムをモチーフに戯曲『文明の果実』を書き、小説『アンナ・カレーリナ』ではランドーという名の霊媒を登場させている。さらにドストエフスキーやソロヴィヨフが近代スピリチズムに興味を示したこともよく知られている<sup>(8)</sup>。ロシア社会にとって近代スピリチズムの伝来と流行は、通常考えられている以上に大きな事件だったのだ。

さて、このように近代スピリチズムがロシア社会にもたらされた時期とは、思想史的には「60年代」、あるいは「大改革期」と呼ばれる時期にほぼ一致する。これは敗色濃厚なクリミア戦争末期にアレクサンドル二世が即位した1855年から一連の改革が一段落する1864年前後を指す時代区分である。この時代は旧

套墨守を脱して全般的な改革に向けて大きくロシア社会が活性化した時代である。自然科学の分野でも新たな知識、新たな原理が数多く発見された高揚期であった<sup>(9)</sup>。それと同時に、社会の大規模な変動に伴って、旧来の伝統的な判断基準が大きく揺らいだ時代でもあった。近代スピリチズムがロシアに伝来し、やがてそれがロシア社会に根付く中で、ある者はそれを靈魂不滅を証明するものとし、またある者は科学の新しい可能性を開くものとして、それぞれ注目したのも、このような時代背景と無縁ではなかろう。前者のグループには、ソロヴィヨフやドストエフスキーらを入れることができるが、本論で焦点を当てるのは、後者のグループ、すなわち、スピリチズムを科学の対象としようとした人々である。特にロシアにおいては、1875年以降に、スピリチズムを科学の対象にしようとする人々が出て、さらにはその是非を巡って論争が展開するなど、スピリチズムが大いに衆目を集めたことがある。「スピリチズム論争」である。

本論では、このロシアにおける「スピリチズム論争」を分析の素材にする。これは、動物学者のヴァグネルがスピリチズムに新たな自然科学の可能性を確信して広くスピリチズムの研究を呼びかけたのに端を発し、化学者のメンデレーエフの提唱でペテルブルク大学物理学会にスピリチズム研究のための調査委員会が設立され、さらにそこでの調査結果をジャーナリズムが逐一報道するなど、専門家の論争にとどまらない、ロシアの教養社会を巻き込んだセンセーショナルな騒動へと発展した事件である。スピリチズムは科学との関わりの中で、世間の関心事となったのだった。

先回りして論争の結論から言うなら、この調査委員会においてメンデレーエフが導き出した最終結論は、「スピリチズム現象は、無意識の運動または意識的な欺瞞から発生し、他方、スピリチズムの教説は迷信である<sup>(10)</sup>」というものだったが、本論では心霊現象の存否、あるいは委員会の結論の正否を課題としたものではないし、ましてや個々の霊媒のトリックを暴くことを目的としたものでもない。むしろ本論の意図は、ロシア社会の思想状況の一端をスピリチズム論争を通して垣間見る、というところにある。ソ連時代に空想や唯心論に対する、科学と唯物論の優位を示すものとして高く評価された「戦闘的唯物論者メンデ

レーエフ」の結論がはたしてスピリチズム論争に決着をつけたのか<sup>(11)</sup>、換言すれば、スピリチズム論争において、科学は迷信に勝利したのか、という論点に目を配りつつ、当時の思想状況の中でスピリチズム論争を分析してみたい。

## I 発端：ヴァグネルの「手紙」

論争の発端となったのは『ヨーロッパ報知』に発表されたニコライ・ペトローヴィッチ・ヴァグネルの「スピリチズムに関する編集部への手紙」だった<sup>(12)</sup>。1875年4月のことである。『ヨーロッパ報知』は1866年にM. M. スタシュレーヴィッチによって創刊された月刊誌で、75年当時は「歴史、政治、および文学雑誌」を標榜した、穏健なりべラル世論を代弁する雑誌だった<sup>(13)</sup>。他方、「手紙」を発表したヴァグネルはサンクト・ペテルブルク大学の教授で、専門の無脊椎動物学に関する著作のほかにも『雄猫ムルルイッカ』などの童話も書いている<sup>(14)</sup>。

この「手紙」においてヴァグネルは、降霊会において従来の科学では説明できない現象が起こっていると主張し、その現象を科学的に研究することが必要だと訴えている。これは当時英国でウィリアム・クルックスが科学的な手段によって「心霊力」を解明しようと活躍していたので、それに倣ったものと考えられる。放電管の発明や元素タリウムの発見で有名な物理・化学者のクルックスは、近代スピリチズムが示す、未知の現象の数々に科学の新しい可能性を見て、ダニエル・D・ヒュームやフローレンス・クックといった霊媒を調査してスピリチズム擁護の論陣を張っていたのだ。折しも1874年にはクルックスの『スピリチュアリズム現象の研究』が発表され、そこでヒュームの霊媒能力が「証明」されているので、実際にヒュームの降霊会に立ち会った経験を持つヴァグネルとしても無関心ではいられなかったに違いない<sup>(15)</sup>。

本章ではまず、「手紙」の記述に従って、ヴァグネルがスピリチズムに興味を持つにいたった経緯を読み取ることから始めたい。

「手紙」は、ヴァグネルが「20年以上の知己である」のブトレロフ教授に誘わ

れて「スーパースター」霊媒ヒュームの降霊会に参加したときの記録から始まっている<sup>(16)</sup>。ヴァグネルが最初にヒュームの降霊会に参加したのは、「手紙」の4年前、つまり1871年のことだった。71年という年をヒュームの側からいうなら、一時はナポレオン三世やアレクサンドル二世の宮殿に出入りするなど、ヨーロッパ上流社会の寵児となった感のあったヒュームが落ちぶれ、スキャンダルにまみれていたところを、A. H. アクサーコフに救われ、ロシアに迎え入れられた年でもある<sup>(17)</sup>。当時ヒュームはブトレロフの妻方の家系をたよってブトレロフの家に居を寄せていた<sup>(18)</sup>。他方、ブトレロフはもっぱら、スピリチズムに熱中し、ヒュームの降霊会をすっかり信じ込んでいたようだ。とはいえ、ブトレロフに誘われたヴァグネルの方は、というと、旧知の仲のブトレロフを信じつつも、当初、ヒュームの心霊現象自体に対しては懐疑的であった。すでに内外のジャーナリズムの批判的な論調を知っていたためである。というわけでヴァグネルは「全く信じておらず、いやいやながら」ヒュームの降霊会に参加することになる<sup>(19)</sup>。

降霊会の当日になっても、ヒュームの心霊現象（ヴァグネルの用語では「霊媒現象」）を信じる気になれないヴァグネルは、降霊会の前に、事前にブトレロフの家で実験しようと提案する。彼は自ら「そんなに大きくないが十分に重い」丸テーブルを持ち出して、ヒュームぬきで、ヴァグネルと2名の友人、ブトレロフとやはり旧知の婦人、以上5名で降霊会をはじめたのだ。テーブルの上に手を置いて待つこと20分。当然のことながら何事も起こらなかった<sup>(20)</sup>。

そこに肩掛けを羽織ったヒュームが部屋に入ってくる。一同が断るのも聞かずにヒュームはヴァグネルの脇に座ると、ものの5分もたたないうちにテーブルはヴァグネルの方へと動き出した。それでもトリックの可能性を疑うヴァグネルは、ヒュームの足がどこにあるかたずねる。これに対してヒュームは、両足をヴァグネルの足の上に置いて、足でテーブルを動かしていないことを示す。それでもまだ信じられないヴァグネルは、さらにヒュームの両手両足に注目するが、やはりテーブルは動き続けた。かくしてヴァグネル「疑いもなくテーブルが動いたこと」を認めたのであった<sup>(21)</sup>。

「説明しようのない」「何か異常なこと」を目の当たりにしたヴァグネルは、スピリチズムがトリックにすぎないのではないか、という疑いを捨てきれずにはいるものの、目の当たりに見たヒュームの降霊会におけるトリックの可能性を「非常に困難なこと」と考えて、この未知の現象を説明するために様々な仮説や理論を立てようと試みる。ところが、そのための観察データがない<sup>(22)</sup>。

新進気鋭の若手科学者の勸がそうさせたか、スピリチズムに興味を抱いたヴァグネルは、その後ペテルブルクで2回、ヒュームの降霊会に出席してこの現象をより詳細に観察しようとする。最初の降霊会ではほとんど何も起こらなかったが、2回目の降霊会は「十分成功した」という<sup>(23)</sup>。降霊会にはヒュームとヴァグネル、そして信頼のできる5人の旧友が参加した。降霊会が始まって10分から15分後にテーブルが動き出し、叩音が聞こえたが、彼はこれらを「ヒュームによってもたらされたものではなかった」と考える<sup>(24)</sup>。これらの現象は周期的に強弱を繰り返しながらも強くなり、そして最後に「完全な静寂が訪れた」という<sup>(25)</sup>。このほかにもヴァグネルはこの降霊会の最中に、机上のナプキンが拳骨の形に隆起したり、アコーディオンが空中に浮揚するさまを目撃し、人間の形をした白い物体が出現したり誰かに触れられたり、という体験をするが、これらの現象については、降霊会における出席者と霊媒との異常な心理状態、つまり霊媒による誘導の可能性（現在の用語で言えば催眠術と言うことになる）を指摘して、「純粹に主観的なもの」として否定している<sup>(26)</sup>。

ともあれこの降霊会によってヴァグネルは「テーブルの動きと叩音は実際に存在した」という信念に達し、これらの現象が物理学と心理学の両学問領域に属することを主張する<sup>(27)</sup>。このように原因不明ではあるが未知の現象が実在したことを確信したヴァグネルは、「真のスピリチズム現象」を科学の対象として研究する必要を痛切に感じたのだった。このような立場から彼は、アクサーコフやブトレロフに対しては、彼らがこれらの現象を研究しようともせずに単に娯楽のために熱中している、と批判したのであった<sup>(28)</sup>。

そんな折り、ヴァグネルは、アクサーコフとブトレロフがパリから招待したプロの霊媒カミール・ブレディッフの降霊会に誘われる。都合10回にわたって

アクサーコフ家で繰り返された降霊会では、ヒュームの降霊会よりずっと顕著な現象があらわれた。叩音のほかにも、誰も手足を触れていないテーブルが振動し、浮上したのだった<sup>(29)</sup>。テーブルは「半アルシンの高さ」まで浮上し、そこに「12秒間」とどまったことすらあった。さらにはヴァグネルの背後にあった別のテーブルが動き出すという現象まで体験するに至って、彼はこれを降霊会における現象の「最も驚くべき証拠」とみなす。なぜなら、テーブル回転などの霊媒現象は、従来、参加者の無意識の筋肉運動によって説明されてきたからである。ところが、誰も手を触れていないのに物体が動く、というこれらの現象は、無意識の筋肉運動では説明しきれない現象だった<sup>(30)</sup>。未知の物理エネルギーが介在しているかも知れないのだ。

さらにヴァグネルは、ブレディップの降霊会において「テーブル会話」も体験している。「テーブル会話」とは、テーブルが叩音でアルファベットの文字を示し、それによって会話する、というものである。テーブルはゲーテの詩の一節を綴ったりしたが、ここからヴァグネルは夢の中のとりとめのない会話を連想はしたものの、あまり重要視していない<sup>(31)</sup>。

このように「手紙」において自らの体験を語った後にヴァグネルは、これらの現象に対する仮説を試みる。

まず、実際にこれらの現象が実在したか、という点について、ヴァグネルは「実在を深く確信している」と断言する<sup>(32)</sup>。「霊媒現象が発見された」のである<sup>(33)</sup>。これは度重なる降霊会での観察から得られた確信である。さらにこの確信は、これらの現象が一般的な物理法則に従っているに違いない、との信念へと発展する<sup>(34)</sup>。いかなる未知の力にしろ、物理的な現象を併う以上、物理法則を無視することはできないのだ。とはいえ彼は、当時定説となっていたファラデーによる無意識の筋肉運動説、あるいはカーペンターの「無意識的大脳作用」説に対しては否定的な態度を示す<sup>(35)</sup>。その上でヴァグネルは、霊媒とは、特殊な性格を持った神経組織を備えた人物であり、降霊会においてある種の「力」が霊媒に集中して、その結果、一定の現象が生じるのだ、との仮説を提示するのだった<sup>(36)</sup>。



ヴァグネルは、降霊会参加者の「温度」や「電気」が、さらには「心理的な力」とでもいうべき力がテーブルを介して霊媒に集中しているのではないかと考え、この力は人体から発する、物理的諸力を伴った「心理的な力」ではないかと、との仮説を立てた<sup>(37)</sup>。とはいえ彼は、これらの仮説が「全く不満足なもの」であることも認めている。なぜならこれらの現象は、従来の科学的知識からあまりにかけ離れているからだ<sup>(38)</sup>。ただし、「これらすべての現象が降霊会の参加者と主に霊媒の心理的活動の所産であること」は確実だと考えている<sup>(39)</sup>。

このように観察結果と仮説を提示した後、それだけでは足りないと考えたのか、ヴァグネルは、さらにもう一例の「全く普通でない」現象を紹介している。これは降霊会の最中に中国人女性「ジェイク」を名乗る霊が出現し、メモを残したり、空中に手が出現するという、いわゆる「心霊顕示」あるいは「物質化」と呼ばれる現象である。さすがにこれにはヴァグネル自身も「現在それを解説することは不可能と考える」、とお手上げ状態である<sup>(40)</sup>。とはいえ、ここに書かれた「物質化」の現象は、英国ではすでに一般的な霊媒現象だった。上述の霊媒少女フローレンス・クックも、降霊会においてケティー・キングという名の霊を「物質化」することで有名だった。降霊会において、ついたての陰でトランス状態になっているクックとは「別の」ケティー・キングと名乗る女性が現れるのだった。

この、現在の我々の常識からすると、トリックとして一蹴する以外にない現象の数々であるが、当のヴァグネルにとっては現実に起きたことであり、それゆえ科学によって解明すべき現象であった<sup>(41)</sup>。しかも彼は、このような能力を備えた霊能力者がアメリカではすでに 11,000,000 人を数えるほど急増している、と信じられないような数字をあげながら<sup>(42)</sup>、自らが目撃した現象が科学に新しい分野を開くことを確信しつつ、「電気や流電気学を発見した物理学者」や心理学者に対して「継続的でねばり強い研究」の必要性を訴えたのであった<sup>(43)</sup>。

## II 反論：ラーチンスキイの批判

心霊現象に対する研究を呼びかけるヴァグネルの「手紙」に対する反響は、すぐさま現れた。『ロシア報知』同 1875 年 5 月号、つまりヴァグネルの「手紙」の翌月に発表された C. ラーチンスキイの「ヴァグネル氏のスピリチズム現象の報告について」である<sup>(44)</sup>。『ロシア報知』は、1858 年創刊の月刊誌で、農奴改革前は穏健なりベラル的な世論を代表して部数を伸ばしたが、農奴改革の後には、混乱した社会情勢を背景にカトコフによって保守的な編集方針がとられていた<sup>(45)</sup>。さて、この『ロシア報知』に 20 ページにも及ぶ長大な記事を即座に発表していることからラーチンスキイがヴァグネルの「手紙」を焦眉の問題として捉えていることがうかがえる。

ラーチンスキイが「ヴァグネル氏の論文は取り返しの付かない害悪をもたらす」と確信し、「最も入念な批判」にさらす必要があると考えたのは<sup>(46)</sup>、「その正確かつ好奇心に富む観察で有名なヴァグネル」と「有名な化学者ブトレロフ氏」の二人がそろって心霊現象を観察し、それを認めていることにあった<sup>(47)</sup>。権威ある学者がそろいもそろって霊媒現象を認めた論文を発表すれば、読者もまた、霊媒現象を信じてしまうのではないか、と危惧したのだ。

とはいえ、ラーチンスキイ自身、全く霊媒現象に無縁だった、というわけでもないらしい。むしろ、彼自身、霊媒現象に興味を持ち、自然科学者として、その現象に自分なりの解釈を下していたようだ。ところが『ヨーロッパ報知』に発表されたヴァグネルの観察とそれに対する説明は未知の力のみならず霊の存在まで認めたものであり、それがあまりに自らの解釈から逸脱していたために、あえて批判の筆を執ったと思われる<sup>(48)</sup>。

ヴァグネルに対するラーチンスキイの批判の要点は、ヴァグネルが種々の「霊媒現象」をすべて一括して「存在した」と認定している点であった。ラーチンスキイによれば科学で説明できる現象もトリックもひとまとめにしてすべて同一の原因、おそらくは霊の力、によるものとしている点、つまりは従来の自然

科学で説明できない現象として解釈している点にヴァグネルの根本的な誤りがあった。「ヴァグネル氏のスピリチズム現象の報告について」に於いてヴァグネルを批判するにあたって、ラーチンスキイはまず、ヴァグネルが「手紙」に於いて記録した霊媒現象を以下の3種類に分類し、それぞれ個別に検討すべきだと主張する。

1. テーブル回転：テーブルなどの物体の運動や単なる叩音現象。
2. テーブル会話：テーブルが（叩音などで）文字を示して言葉を構成する現象。
3. 心霊顕示：霊魂が物質化してこの世に現れる現象<sup>(49)</sup>。

このうち「1. テーブル回転」については、ラーチンスキイ自身もかつて経験したことがあるため、このような現象がおこること自体は認めており、それを彼は無意識の筋肉の収縮によるものと考えている<sup>(50)</sup>。「1. テーブル回転」は従来の自然科学の常識でも説明できるのである。ただし、「1. テーブル回転」の中でも職業的な霊媒が介在するものに対しては懐疑的である。特にテーブルが「ヴァグネル氏の観察によれば12秒間も空中にとどまった」例については「真暗闇の中で起こったこと」として「私が観察したことの無い」「全く例外的な現象」として否定的だ<sup>(51)</sup>。

ラーチンスキイによれば、「2. テーブル会話」と「3. 心霊顕示」は「1. テーブル回転」と本質的に異なる。「1. テーブル回転」は無意識の筋肉の収縮の結果として起きる可能性があるのに対して、「2. テーブル会話」と「3. 心霊顕示」は、降霊会参加者と問答する点で知的な存在を前提とし、かつ、自然科学で説明できない未知の力の存在を認めなければ説明ができないからである<sup>(52)</sup>。

このような知的かつ未知の力の存在を否定する立場からラーチンスキイは、ヴァグネルが確認したとされる「2. テーブル会話」と「3. 心霊顕示」の事例を批判的に検証してゆく。まず、「ジェイク」なる中国人女性の霊があらわれ、霊の手が出現したとされる「心霊顕示」の観察結果については、霊媒ブレイクアップのトリックの可能性およびヴァグネル自身の先入観の可能性を指摘して、こ

の観察の客観性を否定する<sup>(53)</sup>。また、テーブルが空中に浮揚した例についても、霊媒がシャツの袖の下に「鉄のフック」を隠しており、それでテーブルを持ち上げたのではないか、とトリックの可能性を指摘する<sup>(54)</sup>。ラーチンスキイにとって、こうした「ペテン」を繰り返す「悪名高いヒューム」のようなプロの霊媒は「特に危険」であった<sup>(55)</sup>。善意の観察者を誤りに導くからである。

それと同時にラーチンスキイは、ヴァグネルの論文が一般大衆に対して霊媒現象研究を呼びかけていることをも危険視する<sup>(56)</sup>。すでに述べたように、ラーチンスキイは一部の「テーブル回転」の原因を無意識の筋肉収縮であるとする、つまりは自然科学の対象になりうると考えている。しかしながら、霊媒や同席の出席者を無批判に信じ込んでテーブルの動きや叩音を期待するような主観的な態度では科学的な研究はできない。このような対象は、ペテンに惑わされやすい大衆ではなく、神経病や精神医学の専門家にのみ任せるべきなのだ、というのがラーチンスキイの立場である<sup>(57)</sup>。

ヴァグネルがアメリカにおける霊能力者の数として挙げた11,000,000人という数字に対してもラーチンスキイは懐疑的である。この数字がいくら大きくても、それは「この世の外の、我々とテーブルによって会話する知的な力の存在」を証明してはおらず、むしろ、それは「プロテスタント世界一般にわき起こっている強烈な宗教的渴望」を示しているにすぎないのだ、と彼は指摘する。ここから彼はスピリチズムの流行の中に、プロテスタント社会における「大いなる宗教的危機の前兆」を見る。というのも、「スピリチズムに熱中する信奉者の大部分にとって、それは宗教の代用品」として機能しているからである<sup>(58)</sup>。ラーチンスキイにとって、ロシアはそのような宗教危機とは無縁であり、したがってスピリチズムによって大衆の関心をあおり立てるヴァグネルの「手紙」は見過ごすことができない代物だったのである。

総じて言うなら、ラーチンスキイの反論は、近代スピリチズムが伝来してから10年以上経過して、ある程度冷静に対応することができるようになった70年代ロシア社会の常識的な見解を代弁したものであった。

### III メンデレーエフの調査委員会

1875年5月6日、ペテルブルクの物理学会例会の席上で、メンデレーエフの発議によって「サンクト・ペテルブルク帝国大学付属物理学協会内いわゆる霊媒現象調査委員会」（以下「調査委員会」と略称）の設立が議決された<sup>(59)</sup>。調査委員会の目的は「いわゆるスピリチズムあるいは霊媒現象と呼ばれる現象」、つまり「テーブル回転、叩音の助けによる見えない存在との会話、物体の重量減少の実験、および霊媒を介した人型の呼出」を調査し、「正確に観察し」「可能なら」「新しい力」を発見することとされた<sup>(60)</sup>。権威ある学会に於いてスピリチズムが科学の対象として認められてしまったのである。

物理学会の席上でメンデレーエフは、「霊能力者の実験において新しい、未知の自然の力を示すようなものがあるのか、または、テーブル回転などの現象が、手やその他の体の一部の圧力によって説明されるのか、そして人型の出現はまやかしにすぎないのか」明らかにする必要がある、と調査委員会の設立を訴えた。とはいえ、メンデレーエフの確信は、あきらかに後者、つまりは霊媒現象の否定にあった。したがって彼の真意は、「新しい力」を調査することではなく、むしろ霊媒たちのペテンを暴いてその「結果を発表し、新種の迷信の発展に対して垣根を設けたい」、つまりスピリチズムという「根拠のない教説」や「迷信」を論破し大衆、特に若者を善導しようとしたのだった<sup>(61)</sup>。実際、後にメンデレーエフは別の機会に「若者の中でのスピリチズム運動を押し止めること、これこそが私の目的だ」と委員会の設立動機を語っている<sup>(62)</sup>。

メンデレーエフがあえて委員会を組織してまで霊媒現象を暴露する必要があると考えたのは、「神秘主義の普及」が、大衆を「健全な見解から背かせ、迷信に耳を傾かせる」からであった<sup>(63)</sup>。特にメンデレーエフは、「家庭の団欒のみならず学者の間でも」スピリチズムが関心を集めていることを危険視した<sup>(64)</sup>。これは、すでに述べたように、一般誌たる『ヨーロッパ報知』や『ロシア報知』誌上に発表されたヴァグネルやラーチンスキイの論文を念頭に置いたものであ

る。スピリチズムという「迷信」が科学の装いをまとうて公開の場に登場したことが我慢ならなかったのだ。

メンデレーエフの要求は受け入れられ、翌5月7日には物理学会からメンデレーエフを含む11人のメンバーが出席して、調査委員会の第1回の会議が開かれた。議長および書記が選出された後、霊媒現象の専門家としてアクサーコフ、ブトレロフ、ヴァグネルらの協力を仰ぐことが取り決められた。調査委員会自体が物理学会内に設けられたため、学会員でない彼らは調査委員会のメンバーにはなれなかったのだ。

他方、調査委員会に招待されたアクサーコフの方は、メンデレーエフの設立趣旨を読み、そこでメンデレーエフがスピリチズムを「根拠のない教説」、「迷信」と呼び、彼の仮定に沿わないものは「まやかし」と断じていることにおどろく<sup>(65)</sup>。アクサーコフにとって、調査委員会とは、スピリチズムを客観的科学的に調査するための機関のはずだった。結論が先にあるようなメンデレーエフに反感をいだいた彼は、メンデレーエフがスピリチズムについて「何も知らないのに、それに関する教説が『根拠がない』ということだけは知っている」と彼の先入観を非難したのだった<sup>(66)</sup>。とはいえ、アクサーコフの側としてもスピリチズムを擁護する立場から、その実在を科学的に証明すること自体には異存はなかった。

かくして翌々日の5月9日の第2回調査委員会には、アクサーコフ、ブトレロフ、ヴァグネルの3名が招待を受けて出席した<sup>(67)</sup>。まずはじめにアクサーコフがスピリチズムについて解説することから会議が始まった。霊媒現象について解説する中で、アクサーコフは、霊媒現象を4つのカテゴリーに分類して論を進めた。

- a) 人間の手が接触した状態で非生物が動く現象。
- b) 人間の手が接触しない状態で非生物が動く現象。
- c) 人間の手が接触、あるいは接触しない状態で非生物が動いたり音を発して対話、筆記する現象。
- d) 霊媒がいる状態で人体の一部または全部が出現する現象。

このようにして霊媒現象を分類した上で、アクサーコフは上記の a)～c) の3者は従来の物理化学によって説明できるにしても、最後の d) の現象は説明できないと述べ、これにヴァグネルが同意した。これに対してブトレロフは、上記の a)～c) の3者が従来の科学によって説明できるなら最後の d) の現象もまた従来の科学によって説明できるであろうと異論を述べた<sup>(68)</sup>。擁護派内にも若干の温度差がある。とはいえ、前3者に関して招待されたスピリチズムの専門家は皆、同じ意見だった。これらの霊媒現象は実験の対象になりうるのだ。かくして調査委員会は、最も研究に適していると思なされる上記の a)～c) の3者を対象に、毎週1回、霊媒を招待して、1875年9月から1876年5月までの期間、霊媒現象を研究することを決議した<sup>(69)</sup>。

さて、ペテルブルク大学物理学会に霊媒現象を調査するための委員会が設立されたニュースは、世間の関心を集め、大々的に報道された<sup>(70)</sup>。アクサーコフ自身もまた、積極的にジャーナリズムに調査委員会の議事録を提供し、スピリチズムの宣伝に利用した。同時に彼は、調査のために霊媒能力のある人をロシア内外から公募したが<sup>(71)</sup>、この呼びかけに応じる霊媒はロシアはおろか、アメリカやイギリスからも現れなかった<sup>(72)</sup>。霊媒の公募に失敗したアクサーコフは、ニューヨークの神智学協会を通じて何人かの霊媒と交渉したが、彼らは皆、調査委員会の招待には応じなかったか、または招待に応じてもアクサーコフの側の実験条件に同意しないか、のいずれかだった。イギリスでも状況は同じようなもので、すでに述べたヒュームもまた、健康状態を理由にとうの昔に引退した後だった。結局アクサーコフは霊媒の評判を頼りに、自ら英国ニューカステルに出向いて17才のウィリアム・ペッチと13才のヨセフ・ペッチという2人の兄弟を発見し、彼らの霊媒能力を確認した上で、彼らをペテルブルクに連れ帰ってきたのであった<sup>(73)</sup>。

10月25日の第3回調査委員会に於いて、このペッチ兄弟を使って霊媒現象を調査することが議決され<sup>(74)</sup>、11月に入ると実際に霊媒現象についての調査が開始された。テーブルの動き、紙の上への滴の出現、鐘の動きおよび音などの霊媒現象を観察するために、11月11日、13日、18日、20日と都合4回の降霊

会が催された。結局いずれの降霊会に於いても、最初の降霊会で滴の出現が確認された以外は、霊媒現象と思われるものは何も確認されなかった。唯一の例外が最初の降霊会であり、ここでは霊媒の前に置かれた紙に小さなしみが出来た。ただし滴が出現したのは、霊媒に好きなようにやらせて「何ら予防措置も講じなかった」場合であった<sup>(75)</sup>。

かくして1875年11月21日に開かれた第10回調査委員会において、「注意深く観察されているときには何ら霊媒現象も」「発生しなかった」一方、「霊媒たちが勝手に、いかなる統制をも受けていないときには、そのような現象が観察された」ことが確認され、調査委員会は、「霊媒ペッチ兄弟は常に委員会を欺こうとし、それ故、委員会は彼らをペテン師だと考える」という「判決」を下したのだ<sup>(76)</sup>。

ところがアクサーコフは、この結論をもって霊媒現象が否定されたとは考えなかった。委員会はペッチ兄弟が委員会を欺こうとした咎で兄弟の「道徳性」に対して「判決」を下したが、これはあくまでも兄弟の人格に関する評価であって、一連の実験によって客観的に霊媒現象が否定されたわけではない、というのだ。客観的な現象を調査すべき「科学的委員会が」人格の尊卑を説く「安っぽい裁きの場 судилище になってしまった」というのだ<sup>(77)</sup>。

アクサーコフが論難するように、たしかに委員会の結論は煮えきれないものになっている。なにしろ、期待された「霊媒現象」（それが実際に超自然的なものであろうと、トリックであらうと）が観察されなかったのだ。観察されていない事象を否定できようはずもない。いわゆる霊媒現象がトリックであることを証明しよう、というメンデレーエフの目論見が見事にはずれた格好になった。ところが、世論は納得しなかった。12月4日付の『ペテルブルク通報』は委員会の報告を受けたロシア物理化学会の議事録を転載して「いかなる予防措置も講じられなかった場合に限るが」と但し書きを付けはしたものの「霊媒現象を肯定する証拠と認められる若干の現象が発生した。」と、権威ある学会が霊媒現象を認めたかの論調で報じたのだ<sup>(78)</sup>。

「霊媒現象」のトリックを暴いてスピリチズムの流行に水を差そうとしたメン



デレーエフの心づもりは、ここでもみごとに裏切られたことになる。調査委員会が活動したことによって、かえって世間の関心はスピリチズムに向かってしまったのである。

#### IV 第1回講演会

調査委員会の活動については、アクサーコフやヴァグネルなどのスピリチズム擁護派が「手紙」の形でジャーナリズムに情報を提供して衆目を集めていた<sup>(79)</sup>。なかでも12月2日の物理学会において調査委員会が部分的ではあるにしても霊媒現象を認めた、とする報道は、擁護派を勢いづかせた。また、読者大衆もまた、霊媒現象という訳の分からない現象を調査委員が解明し、納得の行く説明を公表するように望んでいた。メンデレーエフの目論見とは裏腹に、世間の関心はますますスピリチズムに注がれるようになったのであった。

このようなスピリチズム擁護の報道を「激しい怒りをもって」読んだメンデレーエフは、「我々が進歩の敵として非難されているときに沈黙することはできない」<sup>(80)</sup>（「進歩の敵」とは、スピリチズムに科学の新たな領域を予感するヴァグネルが「スピリチズムの敵は進歩の敵」といってスピリチズムに対する研究を呼びかけたことを指す）として、こういった論調に反論することを考えるが、他方、委員会は「その最終結論のみを公表すべき」で、現下の状況で委員会の見解を公表するのは「時期尚早」だとも考えていた<sup>(81)</sup>。

かくして「未完の作業の結果についての公表と沈黙との中間の手段」として、調査委員会の議事録を朗読する講演会が計画された。メンデレーエフにとって、講演会の利点は、第一に聴衆に調査委員会の資料を配付する機会であり、第二に多大の入場料収入が見込める、ということにあった<sup>(82)</sup>。講演会を組織したスラヴ慈善協会の要望で、入場料収入は、「ヘルツェゴヴィナの受難者」を援助するための義捐金に使われることになった<sup>(83)</sup>。

メンデレーエフは、このような講演会の計画を8日付の手紙でアクサーコフに知らせる<sup>(84)</sup>。アクサーコフは、メンデレーエフが調査委員会の議事録を講演

会で朗読することを「驚き」をもって知る。彼は講演会については「時期尚早であり、科学的研究にふさわしくない」と否定的だったが<sup>(85)</sup>、メンデレーエフが講演をする以上、実験の際に霊媒がその能力を発揮できなかった理由について、注釈をつけ弁明する必要があると考えて、メンデレーエフに対して12月11日付で手紙を送った。メンデレーエフは、「可能なら」講演会でそれを読み上げることを約束したが、実際には「読まなかった」<sup>(86)</sup>。

さて、メンデレーエフが調査委員会の活動について講演をする、というニュースはたちまち新聞各社がこれを報じることとなった。なかには入場券の売り切れを心配する報道もあるほどで、講演会に対する世間の関心は非常に高かったことがうかがえる<sup>(87)</sup>。実際、近代スピリチズムがロシアに輸入されてからすでに10年以上の歳月が経っており、かなりの数の人が実際に自分でスピリチズムを試したはずである。叩音やテーブルの動きといった初歩的な動きは「コックリさん」と同様に、素人でも容易に引き起こすことができたので、この不思議な現象を体験した人の数も決して少なくはなかったはずである。こういった人々が、この未知の現象についての説明を聞いて心の平安を得ようと、講演会に足を運んだとしても不思議はない。

講演会は1875年12月15日にペテルブルク市内のロシア帝国技術学会ソリャンヌィ・ガラドーク講堂で開催された。この講演会を実際に組織したのは、ペテルブルクのスラヴ慈善協会。1548ルーブル50コペイカにのぼった入場料収入は、ボスニアとヘルツェゴヴィナ独立のために犠牲になったスラヴ人のための義捐金となった<sup>(88)</sup>。

ところで、スピリチズム擁護派に「反論する」ことを目的としたとはいえ、メンデレーエフはこの講演会においては努めて自制して中立的な立場を守ろうとしたように見受けられる。聴衆を前にしてメンデレーエフは、霊媒現象の一般的な特徴として、「降霊会において、多くの場合は夕べに、薄明かりまたは暗闇で、霊媒と呼ばれる特別な人が臨席した上で、発生する現象で、一般的にその現象は、手品と呼ばれるものに類似しており、それ故、謎めいていて、異常で、通常では再現されない、という特徴がある」と述べる<sup>(89)</sup>。とはいえ、彼自

身「正確な定義」は提示することができず、アクサーコフの分類にしたがってスピリチズム現象の一般的な解説に移る。

すでに述べたように、アクサーコフは霊媒現象を

- a) 人間の手が接触した状態で非生物が動く現象。
- b) 人間の手が接触しない状態で非生物が動く現象。
- c) 人間の手が接触、あるいは接触しない状態で非生物が動いたり音を発して対話、筆記する現象。
- d) 霊媒がいる状態で人体の一部または全部が出現する現象。

以上 4 つのカテゴリーに分類している。メンデレーエフもまた、この分類を踏襲して、すでにヨーロッパで通説となっているファラデーやシェフレルの仮説を紹介しつつ、霊媒現象を説明する。ただし、それぞれの現象についての説明は、一般的な仮説であって、調査委員会の調査に基づいたものではなかった。また、霊媒現象に対する仮説についても、あくまで中立的な態度を貫こうとしているのか、あえてそれに対して批評を加えようとはしていない。

そしてその上で、ヴァグネルらの擁護派が霊媒現象が存在する、と主張していることを紹介して、スピリチズム研究の必要性を説き、調査委員会の存在意義を強調したのだった。このように長い前置きの後で、調査委員会が物理学会内に設立されたこと、調査に当たってはアクサーコフらのスピリチズム擁護派が霊媒を連れてくるなどして協力したことなどが語られ、そして、その後に、いよいよ霊媒ペッチ兄弟に関する調査委員会の調査の内容が聴衆に語られる。印刷された『資料集』のページ数にして 11 ページあまりにのぼる前置きの後に、ようやく本論に入ったわけだが、そこで語られたのは、印刷された分量にして 1 ページ、しかも実験の内容に関しては、わずか数行、しかも、圧力計を備えた特別のテーブルを使った「実験は成功しなかった」、と素っ気ない<sup>(90)</sup>。後は調査委員会の議事録を朗読して、調査委員会に関する説明は終了してしまう<sup>(91)</sup>。「スピリチズムについての判断は語るべきではなく、ただ事実を指摘し、記録するのみ」であり、あとは各人の判断に任せる、という調査委員会の方針をここでも踏襲しているのである<sup>(92)</sup>。

ただし、私的な見解を全く述べなかったわけでもない。講演の最後にメンデレーエフはたとえ話として、調査先で現地の住民が捏造した偽物を信じ込んで、新種の植物を発見したと喜んだ「ある全く有名な植物学者」の話を引き合いに出して、スピリチズム擁護の論陣を張るアクサーコフらの主観性を間接的に批判したのだった<sup>(93)</sup>。

とはいえ、霊媒現象に関して調査委員会が黒白をつけた結論を出したものと信じてこの講演会に足を運んだ聴衆の誰もが、物足りなさを感じたはずである。メンデレーエフの講演は、すでに公表された情報、つまり、調査委員会の降霊会では霊媒現象と思われる現象が起こったが、それは科学的な観察のもとではなく、他方、科学的な観察のもとでは何も起こらなかった、という情報の域を出なかったからである。この講演会の内容は各社の新聞によって報道されたが、それを読んだ読者大衆もまた、同じ物足りなさを感じたに違いない。調査委員会内部でも、黒白をつけるべく、さらに調査が続けられることになったのも当然の成り行きだった。

## V 調査委員会（続き）

調査委員会によるペッチ兄弟の調査は、このようにして煮え切らない結果に終わった。メンデレーエフの講演会もまた、聴衆の期待に添うものではなかった。なにしろ、ペッチ兄弟は、圧力計を備えたテーブルでは霊媒能力を発揮しなかったのだ。かくしてアクサーコフはペッチ兄弟に代わる新しい霊媒を捜し出して調査委員会に提示しなければならなくなった。

アクサーコフがペッチ兄弟の次にイギリスから招待したのは、クライエルと言う名の女性霊媒だった。クライエル嬢は、「明るい場所で」テーブルなどの物体を動かし、物体の重さを変化させ、そして叩音などによって対話することができるとされた。上述のウィリアム・クルックスの実験台になったこともあって、装置を使用した実験も承諾している。「圧力計のテーブル実験」には「まったく適切な」霊媒であった<sup>(94)</sup>。

1876年1月からクライエル嬢を使つての調査が始められた。1月11日の第1回降霊実験会では、普通のテーブルを使った実験では叩音が発生し、テーブルが動き、浮上し、そして落下した。あまりに激しく落下してテーブルの脚が破損したために、別のテーブルに換えて実験したが、やはり叩音が発生し、テーブルが動いた。ところがテーブルを実験用の圧力計が付いたものに換えて実験すると、今度は何も起こらなかった。ちなみにこのテーブルは、テーブル上に加えられた圧力を測定するために、メンデレーエフが独自に開発したものであった<sup>(95)</sup>。

第1回降霊実験会の評価は分かれた。アクサーコフが「テーブルの強力な動きと空中への突然の浮上」を目の当たりにした調査委員会の「パニック」を、スピリチズム擁護の立場から誇らしげに記録する一方<sup>(96)</sup>、メンデレーエフは懐疑的な立場からテーブルが動いたり浮上したときに霊媒が足や指を使った、と主張した<sup>(97)</sup>。

つづく1月25日には第2回降霊実験会が催された。例によって霊媒を招き降霊会を開き、そしてそこでの観察結果を出席者が確認して議事録にまとめる、という作業が繰り返された。現存する議事録には、叩音、テーブルの移動および浮上、そして叩音による対話、といった霊媒現象が起きたことが記録されている<sup>(98)</sup>。スピリチズム擁護派からすれば、ここでもまた霊媒現象が観察され、議事録でそれが確認されたことになる。

ところが、この議事録には、メンデレーエフによる『特別の声明』が添付されている。メンデレーエフは、たしかに上記のような現象が委員たちによって確認され、それ故、議事録に記録されていることは事実である、と認めるが、それと同時に、これらの現象は「霊媒的な」力によるものではなく、霊媒クライエル自身が引き起こしたものである、と主張したのだ<sup>(99)</sup>。この『声明』において彼は、これらの現象が起こった際に、霊媒クライエルの足が動いていることに注目し、(スカートの型を整えるための)「板バネの端」のようなものが彼女のスカートの中に滑り込むのを目撃した、と主張している<sup>(100)</sup>。彼にとっては明白なトリックの現場を確認した、ということになるのだが、ほかの委員が確

認していない以上、これを調査委員会の議事録に記載することはできなかった。調査委員会の運営方法に欠陥があったのだ。しかも彼は、「もし、それらの現象がクライエル嬢のスカートの下から発生している、という信念を私が開陳したなら、おそらく現実的な証拠を提示するよう要求されるだろう」とも述べている<sup>(101)</sup>。自宅や物理学会の研究室で女性のスカートの下を詮索するようなことはできない、というのだ。これは上述のクルックス博士が「美少女霊媒」クックとの関係をスキャンダラスに報道されたことを念頭に置いているのかもしれない。少なくともクルックス博士の事件についてメンデレーエフは、情報として知っていたはずである。いずれにしろ、科学的実験以外の、社会的・文化的な面でも彼は障碍に突き当たったわけである。

2日後の1月27日に霊媒クライエルを実験台にした第3回目の降霊実験が行われた。霊媒クライエルとともにもっぱら降霊会を主導したのはアクサーコフだった。委員の側から計測装置の付いたテーブルで実験しよう、という提案が出たが、アクサーコフはこれを拒否し、結局降霊実験は、通常のテーブルを使って開始された<sup>(102)</sup>。通常のテーブルを使った実験では、またもや叩音がし、テーブルが動き、そして浮上したが、前回のメンデレーエフの指摘を受けて委員の一人がテーブルの下に潜り込んで観察を続けると、今度は浮上しなかった。再びもとの席に着くと、テーブルはまたしても浮上する。スピリチズム擁護派にすれば、霊媒現象がまたしても確認された、ということになるが、他方、メンデレーエフはほぼこの現象をトリックであると確信したようだ。降霊会の後の調査委員会の会議において、メンデレーエフは「正確な研究手段を即刻適用する必要性」について語り、トリックを防ぐための方策をいくつか提案した<sup>(103)</sup>。

この時点でメンデレーエフはトリックのカラクリを見抜いていたと思われる。というのも、メンデレーエフは、アクサーコフに対して、霊媒クライエルと同じ条件でテーブルを浮上させる、それも「完全な明かりの下で」浮上させる、と宣言しているからだ。そして、もしこれができたらアクサーコフが「それ以後3年間、霊媒主義について印刷しない」、その代わりに、もし成功しなかったら今度はメンデレーエフ自身が「霊媒主義についても霊媒についても何も書

かないし何も語らない」、という条件を出す<sup>(104)</sup>。これにはさすがのアクサーコフも驚いて、「どんな手段で？」と問いたです。これに答えてメンデレーエフは、「霊媒力によって」とはぐらかすが、結局アクサーコフはこの条件を退ける。メンデレーエフは「遠からずまた、霊媒主義について語り出すに違いない」ので「危険を冒す必要はない」とアクサーコフは考えたのだった<sup>(105)</sup>。

一方のメンデレーエフにしてみれば、ようやく思いついたトリックを他人に見せたくて仕方がない。とうとう、霊媒クライエルによる私的な降霊会に招待された折りに、メンデレーエフ自身が「霊媒力」を発揮してしまう。降霊会においてメンデレーエフ自身がテーブルを動かしたのだ。テーブルが動いたことに驚く参加者を前に、「これは私がやったのです」と得々と語るメンデレーエフに対して、降霊会の主催者は激怒して「我々は、自分でテーブルを傾げるためにここに集まったのではない」と激しく抗議する、という一幕が繰り広げられてしまったのだった<sup>(106)</sup>。もはやメンデレーエフにとって、霊媒がトリックを使っていることは明らかだった。問題は、いかにそのトリックの証拠を押さえるか、であった。

つづく1月29日に第4回目の、そして最後となった降霊実験が行われた。今回は、調査委員会が用意した特別のテーブルを使用して霊媒現象を実験することになった。そのテーブルとは、その下部をすっかり紙で覆い、しかも霊媒が座る側の脚には柔らかいパテを塗ったものだった。明らかに霊媒が手や足を使ってテーブルを動かしていることを暴くために考案されたものだった。委員会の側としては、可能性をひとつひとつ排除すれば最後に本当の原因が残るはずだ、という科学研究の一般的な手法を採用したにすぎなかったが、他方、アクサーコフはこれを「不信の明白な表明であり、侮辱的なものと見ずにはおけない」<sup>(107)</sup>と態度を硬化させた。降霊会の作法にかなわない、ということか、このテーブルを使った実験は却下され、代わりに委員の一人、ペトロフが考案した、安定性を増すために脚が末広がりになったテーブルを使って実験が開始された。このテーブルを使った実験では、テーブルの横滑りは確認されたものの、振動や叩音は生じなかった<sup>(108)</sup>。

ところでこの第4回降霊実験会に関しては、委員の一人ボブイレフが議事録とは別の『声明』を残している。ボブイレフは降霊実験会の時にテーブルには着かずに霊媒の近くの長いすに座って霊媒の動きを観察していた。そこから彼は、テーブルが動く際に参加者の手が「受動的に」動くのに対して霊媒の手が「全く別に」動いていることに気づく。彼は、「テーブルが彼女の手の下で、彼女の筋肉によって動かされて」いることを確認し、そして、「クライエル嬢が自分の意志で、自分の筋肉の力でテーブルを動かしている」という確信に到達したのだった<sup>(109)</sup>。

別の委員、ラチノフもまた、テーブルが動く「仕掛け」を解明した。霊媒はテーブルの上に置かれた参加者の手の「合力」を察知してその微妙なバランスを崩すことでテーブルを動かしている、というのだ。そして彼は私的な降霊会で自らこれを実験して、「テーブルの動きを」「呼び出せた」という<sup>(110)</sup>。

このような明白な証拠を目撃されても、アクサーコフは一連の現象をトリックとは認めない。ボブイレフの証言に対しても、これを「テーブルが…動いた」という点をとらえて、かえってテーブルの動きを記録しなかった議事録の運営方法の方を批判する<sup>(111)</sup>。また、調査委員会が「すでに本質的に十分普通な」現象となった「叩音とテーブルの浮上」といった「基本的な霊媒現象」さえも認めようとしなないことも不満だった<sup>(112)</sup>。アクサーコフにとって、霊媒現象を何度示してみても認められない以上、降霊実験会を続ける意義はなかった。

そんな折り、スピリチズム擁護派のヴァグネルが2月20日付で調査委員会に対して一通の手紙を提出した。調査委員を辞任すると通告してきたのであった。彼にとって、委員会が「霊媒の尻尾を捕まえることのみ」に全力を注いで、しかも「委員会のメンバーの前で起こった霊媒現象を公衆の目から隠すこと」を「目的」としていることが不満だったからだ。ヴァグネルにとって、このような目的は「全く科学とは無縁」であった。科学の新たな可能性をスピリチズムに見ていたヴァグネルは「全く遺憾ながら、以後の委員会の参加は拒まざるを得なくなった」として調査委員会の活動から手を引いてしまった<sup>(113)</sup>。

ヴァグネルに続いてアクサーコフもまた、3月4日付の手紙で辞表を提出す



る。彼もまた、スピリチズムの「反対者」を自称するメンデレーエフが、講演会において擁護派に反論の機会を与えなかったことを不公平だと批判し、また、調査委員会における霊媒や実験方法、そして議事録の取り扱いにも不満を持っていた<sup>(114)</sup>。また、メンデレーエフとの間の感情的な対立も無視できない。結局アクサーコフもまた、「上記のような理由で、私の委員会への協力は不可能になった」として調査委員会の活動から離脱してしまった<sup>(115)</sup>。ブトレロフもこれに続き、同3月4日付の手紙で辞意を表明した。かくしてスピリチズム擁護派は一人残らず調査委員会から離脱してしまったのである<sup>(116)</sup>。

3月8日に調査委員会の16回目の会議が開かれ、上記の3通の手紙が審議された。スピリチズム擁護派の協力が得られない以上、実験を続けることは不可能であった。委員会は以後の調査活動を終了することを議決した。かくして調査委員会に残された仕事は、調査の結論をまとめ、それを発表することだけとなった<sup>(117)</sup>。

## VI 調査委員会の結論と世論

3月11日の第17回会議、3月16日の第18回会議を経たあとに、1876年3月21日の第19回会議において、調査委員会はそれまでの霊媒現象研究に関する最終結論『委員会の結論』を採決した<sup>(118)</sup>。この『結論』では、テーブルの動き、テーブルの浮上、叩音、そして「物質化」といった霊媒現象について、それぞれ霊媒のトリックが暴露され、最後は「スピリチズム現象は、無意識の活動または意識的な詐欺によって発生し、他方、スピリチズムの教説は迷信である」というスピリチズム全面否定の言葉で締めくくられた。

調査委員会の『結論』は、スピリチズムに対するメンデレーエフの勝利宣言、という性格を帯びていた。もはやメンデレーエフの関心は、霊媒現象を科学的に解明することにあるのではなく、「霊媒現象」と呼ばれるトリックを暴露して一般大衆を善導する、という啓蒙的な使命感であった。メンデレーエフが、ペテルブルクの新聞社に対してその公表を要請したとき、彼を駆り立てたのもこ

の使命感だった<sup>(119)</sup>。一方、メンデレーエフの要請を受ける形で、ペテルブルクの各紙は先を争ってこれを掲載した。スピリチズムに対する世間の関心が高まる中で、改めてメンデレーエフは4月に講演会を行って、一般聴衆に対してスピリチズムについて直接講演する。メンデレーエフにしてみれば、これでスピリチズム擁護の世論にとどめを刺そう、ということだった。

4月24日(および25日)に、前年の12月に行われた第1回目の講演会に引き続き、前回と同じ会場でスピリチズムに関する講演会が開催された。極力自制して中立的な立場を貫こうとした前回の講演会とは異なって、今回の講演会においてメンデレーエフは、スピリチズムに対して全く否定的な態度に終始する。講演会の冒頭で彼は、スピリチズム一般についての説明をしながら、現在流行しているスピリチズムとは「新しい教説」に結びつけられた「古い迷信」にほかならず、「科学をよく知らない大衆の中に支持を見つけ出そうとしている」点が危険である、とスピリチズムを全面的に否定し、その危険性を強調したのだった<sup>(120)</sup>。

次に、講演会の聴衆に対してメンデレーエフは、スピリチズムの一般論に入る。彼は、「スピリチズムの初歩的な現象」として叩音とテーブルの動きを挙げ、その原因として考えられてきた仮説を列挙する<sup>(121)</sup>。彼が霊媒現象を説明する仮説としてあげた6つの仮説を列挙すると、次のようになる。

最初にメンデレーエフが「霊媒現象」の原因として可能性を指摘したのが、1. 「器官」説であった。これは、霊媒が自分の関節を鳴らして叩音を出しているのだ、と説明するものであった。

次に彼が提示したのが2. 「機械」説であった。これは、参加者の筋肉が無意識に収縮してテーブルを動かしているとするものである<sup>(122)</sup>。

また彼は、3. 「マグネチズム」説という、現在の我々の目から見ると奇妙な説も提示している。これは19世紀前半まで流行していたアニマル・マグネチズムの仮説を拡大解釈したもので、神経組織に充満している一種のエネルギーが放電現象のように放出され、その際に叩音や物体の移動が発生する、とするものである<sup>(123)</sup>。

メンデレーエフが4番目に挙げた仮説が4.「靈魂」説である。これは死後も靈魂が存在するとすることを前提として、その靈魂が何らかの手段でこの世に靈媒現象を起こしている、と説明するもので、スピリチズムの教説が依って立つ基盤である。ただし、この仮説に対してメンデレーエフは全く否定的である。というのも、この仮説では「靈魂」の会話が靈媒の知力を反映するのはなぜか、という疑問を説明できないうえ<sup>(124)</sup>、「靈魂」の存在自体、証明不能なのである。靈魂の存在を証明できない以上、靈媒現象を靈魂の力によって証明することもまた、できないことになる<sup>(125)</sup>。そもそも靈魂は科学の対象にはならないのだ。

続いて5番目に挙げる仮説が、5.「欺瞞」説である。これは降靈会において靈媒が参加者を欺いて、靈媒現象が起こったように思いこませている、とするものである<sup>(126)</sup>。たとえば叩音やテーブルの動きは、靈媒が服の下に隠した器具を使って起こしていることが考えられるし<sup>(127)</sup>、心靈写真は二重写しで説明できる<sup>(128)</sup>。彼によれば、その他の現象も手品に他ならないのであって、靈媒現象は欺瞞説で解釈すべきものなのであった<sup>(129)</sup>。

最後にメンデレーエフが紹介する仮説が6.「自己欺瞞」説である。これは、靈媒現象を見たい、という観察者の「幻覚状態」「恍惚状態」が靈媒現象を実際に見たような錯覚をもたらす、とするものであるが<sup>(130)</sup>、当時の心理学はこの分野においては未発達の状態にあったためか、メンデレーエフ自身、「自己欺瞞の可能性を少なくするような状況で観察と実験を行うよう務めなければならない」<sup>(131)</sup>と述べるにとどまり、このような観察者の心理状態を科学によって客観的に証明することは絶望視している。

さて、アクサーコフらのスピリチズム擁護派との論争に関して言うなら、彼らは、靈媒現象が実在し、かつまた、その原因を4.「靈魂説」に求めているので、彼らを論破するためには、「靈媒現象」と呼ばれるものが、上記の6つの仮説の中で「靈魂説」以外の原因で起こることを証明すればよいことになる。「自己欺瞞説」は証明不能なので、実験時に排除すると、残るのは5つの仮説と言うことになる。結局「靈魂説」以外の4つの仮説のいずれかによって靈媒現象が起こることを説明できれば、「靈魂説」は否定されることになる。メンデレー

エフは、最初の3つの仮説については、実験によって「霊媒現象」との因果律が証明できる、と考えていた<sup>(132)</sup>。また、霊媒がペテンを働いていることを証明しても、霊魂説は否定される、とメンデレーエフは考えた。

こうしてみると、調査委員会の目的は、メンデレーエフが物理学会で説明していたような、霊媒現象を「正確に観察し」「可能なら」「新しい力」を発見すること、にあるのではなく、科学的な実験方法によって、1～3の仮説を証明するか、または、端的に霊媒のトリックを暴くことにあったことが分かる。メンデレーエフが構成した、スピリチズム教説否定のための論理と方法はこのようなものであった。

実際、調査委員会の実験降霊会においても、観察者の注目は「霊魂が降臨すること」にあったのではなく、叩音やテーブルの動きといった物理現象を生じさせる力の源泉の解明にあった。霊媒のトリックを暴けるのなら、それが最も手っ取り早い真実、というわけである。ところが霊媒ペッチ兄弟を対象にした1875年の一連の実験において、測定装置の前では霊媒現象は起きなかった。装置抜きのみなる降霊会では「霊媒現象」が起きたが、これらは別段現場を押さえられなかったにもかかわらず、調査委員会によってトリックと認定されてしまった。かくしてペッチ兄弟はトリックの尻尾を掴まれなかったにもかかわらず、「委員会によって詐欺師と認められて」しまったのであった<sup>(133)</sup>。

しかしここで、メンデレーエフのスピリチズム否定の論理には重大な欠陥があることが判明する。「ペッチ兄弟は詐欺師と認めなければならなかったかもしれないが、そのことによって、すべての霊媒がそうだということにはならない」という点である<sup>(134)</sup>。つまり、ペッチ兄弟が「本物でない」と、実証されても、だからといって「本物がいない」ということにはならないのである<sup>(135)</sup>。メンデレーエフ自身、調査委員会でトリックを暴けば一般大衆のスピリチズムへ流行が沈静化できる、と軽く考えていたのかもしれない。とすれば、調査委員会は科学論争の場と言うよりは、多分にイデオロギー的、政治的、ということになりそうである。

すでに述べたように、調査委員会の最終結論は「スピリチズム現象は、無意

識の運動または意識的な欺瞞から発生し、他方、スピリチズムの教説は迷信である<sup>(136)</sup> というものだった。ところがこの結論も、クライエルの「意識的な欺瞞」については根拠があるにしても、その他の点については、実験結果に基づいていない。調査委員会の実験降霊会では、「無意識の運動」によって「霊媒現象」が引き起こされた例は観察されなかったし、ましてや「スピリチズムの教説は迷信である」と断定する根拠もない。調査委員会は靈魂の不存在を証明していないからだ。

ペッチ兄弟に代わってアクサーコフが調査委員会に提示した二番目の霊媒クライエルに関する調査結果を説明する際も、メンデレーエフの論調は、スピリチズムに関する科学的客観的な論争、と言うよりは、個々の霊媒やスピリチズム擁護派の人格に対する攻撃、それも個人的感情を含めての人格攻撃という様相を呈する。

講演会において、スピリチズム擁護派が勝手に調査委員会から脱退した、とって彼らを批判する際もメンデレーエフは、多少の事実の歪曲を含めて擁護派の非を難じている。12月の第1回講演会に関しても、メンデレーエフが「あらゆる個人的な判断を排そうとして議事録を朗読した」にもかかわらず、スピリチズム擁護派は「霊媒主義に対する偏見にとらわれた先入観」の故に調査委員会を非難し、「それを根拠に以後、協力を拒んだ」<sup>(137)</sup> のだ。そもそも彼らは従来の科学常識を転倒するような事実を示すとして、進んで仕事に取りかかったにもかかわらず、結局何も示すことができず、「やりたくない」と言って「すべての仕事を投げ出した」<sup>(138)</sup> ではないか、とメンデレーエフは擁護派の身勝手さを非難する。しかしながら、これは事実と反する。すでに述べたように、12月の第1回講演会の後もスピリチズム擁護派は調査委員会に協力し続けている。彼らが調査委員会から脱退したのは、二番目の霊媒クライエルのトリックが暴かれた後のことである。

まさに結論が最初からあるような、メンデレーエフのこのような態度こそ、スピリチズム擁護派が容認できなかった点であった。4月24日の講演会において、メンデレーエフがクライエルの霊媒能力を否定したとき、アクサーコフの

堪忍袋の緒が切れた。圧力計を備えたテーブルを使った実験において、「テーブルは傾かなかった」とメンデレーエフが語った瞬間、最前列に座っていたアクサーコフは、発言を求めて立ち上がり、壇上に登って反論しようとしたのだった。会場は騒然となり、その場に居合わせた聴衆は好奇心からアクサーコフを取り巻いた。当然のことながらメンデレーエフの講演会は中断し、翌日に持ち越されることになった<sup>(139)</sup>。

結局、主催者によって反論の機会を与えられなかったアクサーコフは、演壇を降りながら聴衆に向かって、クライエルのテーブルが動かなかったのは、メンデレーエフが力を込めてテーブルを押しえつけていたからであり、そのことはメンデレーエフ自身、議事録に添付した『声明』で認めていることである、と力説し<sup>(140)</sup>、調査委員会の資料を聴衆に示さないのは不公平だとメンデレーエフを非難した<sup>(141)</sup>。実際、すでにトリックのカラクリを会得していたメンデレーエフは、実験中に人知れず力を込めてテーブルを押しえつけることができたのだ。

とても平静な議論など期待できそうもない状況で再開された翌日の講演会の冒頭で、メンデレーエフは、昨日のアクサーコフの非難を受けて、4月に議事録と個々の声明を印刷することを明らかにし、その後、圧力計を使った実験の議事録を朗読した。ただし、その際メンデレーエフは、アクサーコフが言及した『声明』は読まなかった<sup>(142)</sup>。メンデレーエフがテーブルを押しえつけた事実は、結局彼の口からは聴衆に語られなかったのである。ここでもメンデレーエフはアクサーコフの反論を受け流したことになる。

さて、再開された講演会において、スピリチズム擁護派に対する一連の非難の後、メンデレーエフの攻撃の矛先は、擁護派に寄せられてスピリチズム論争を煽ったとして、マスコミに向けられる。最初ヒュームがペテルブルクにやってきたとき、ロシアのマスコミは「彼に対して一様に嘲笑した。スピリチズムの降霊会を冗談のタネにし、それが単なる気晴らしにすぎずそれ以上でないと思われた。その時はまだ、我が国にスピリチズムに共感する何人かの学者がいることは知られていなかったのだ。」ところが、「ブトレロフ教授がそしてその後ヴァグネル教授がスピリチズムを肯定していることが知られると、世論の調

子に変化した」<sup>(143)</sup>。「世界的に有名」なブトレロフが肯定したのを始め、戯評作家のスヴォーリン、そしてドストエフスキーまでが興味を示す記事を公表し始めたのである<sup>(144)</sup>。スピリチズムが公開の場で、一般大衆に対して、科学の対象として説かれるようになったのだ。メンデレーエフが「若者に対する有害な影響」を排すべく調査委員会を設立した所以である。

このようにして設立された調査委員会の成果として、メンデレーエフは、「文芸における意見の転換」を挙げる。当初、スピリチズムに肯定的だったマスコミの論調が、調査委員会の活動によってスピリチズムに否定的なものに変わった、というのだ。なぜなら、「真理」という点で文芸も科学も違いはないからだ<sup>(145)</sup>。さらに調査委員会の活動は国外でも報道されている<sup>(146)</sup>、と手前味噌的に調査委員会の意義を強調した後、メンデレーエフは、科学と迷信という一般論に話題を移す。

曰く、「我々の世紀は現実的な世紀である」。「迷信は根拠のない知識に対する確信である。光が暗黒と戦うように、科学は迷信と戦う」<sup>(147)</sup>。と、迷信との闘争における科学の意義を説きながら、メンデレーエフは自らの研究テーマである気象研究の重要性へと話題を転換する。なぜなら「さまざまな迷信的な考えが天気と結びついている」からである<sup>(148)</sup>。

## むすび

さて、ヴァグネルの「手紙」に端を発した19世紀のスピリチズム論争は、霊媒現象調査委員会の結論を持って、一応の決着を見た。とはいえ、この結論をもってスピリチズムの現象一般が否定された、とはいいがたい。証明の方法論として、個々の霊媒がトリックを使用したことを証明してみても、本当の霊媒がない、霊媒現象なるもの自体が存在しない、あるいはそのような現象が不可能である、という証明にはならないからだ。この点で調査委員会は霊媒現象を否定することに失敗している。

さらにメンデレーエフは、はなから霊媒現象を「迷信」と決めてかかってお

り、いやしくもまともな学者が取り合う対象ではない、と考えていたようだ<sup>(149)</sup>。調査委員会においても、いささか強引な幕の引き方だった。このようなやり方に反感を覚えたのは、アクサーコフらのスピリチズム擁護派のみではなかった。たとえば当時『作家の日記』を執筆していたドストエフスキーは、調査委員会の「報告」が「その記述の仕方と、編集の仕方においてあやまちを犯している」としてメンデレーエフの手法に警鐘を鳴らしている。メンデレーエフが「偏見にとらわれた」態度とるかぎり、スピリチズム擁護派は調査委員会が主観的で非科学的であり、それ故信じるに値しない、と論難することができる、というのだ<sup>(150)</sup>。調査委員会は霊媒現象の調査に当たっての客観性科学性を主張することにも失敗したことになる。

調査委員会＝科学の側のいかにもお粗末な結末、ということになるが、ここからむしろメンデレーエフの、若者を迷信から救おう、という啓蒙家としての使命感を読み取ることもできるはずである<sup>(151)</sup>。上述のドストエフスキーもまた、調査委員会の「偏見」を批判しながらも、「社会の利益のため、軽率な人々を誘惑から救うため」の「教訓的な、予防的な」意味で調査委員会の活動を「有益」と判断している<sup>(152)</sup>。

しかし、人々を救うための啓蒙的使命感がメンデレーエフの高圧的な態度に結びついていることも再度指摘する必要がある。すでに見てきたとおり、霊媒現象がまやかしであり霊媒がペテン師であると最初から決めつけたような運営方法が、科学的調査を期待したスピリチズム擁護派の不満を買い、調査委員会を解体に導いたのであった。ドストエフスキーもまた、「報告書のあまりにも見下した、軽蔑的な調子」を問題にし、「もっと和らげるべきだ」とメンデレーエフの「高邁な態度」を批判している<sup>(153)</sup>。

さらに、このような態度に関してドストエフスキーは、「まじめな」「降霊術の信者」の問題を取り上げている<sup>(154)</sup>。これは、実際にスピリチズムを試してみ、叩音やテーブルの回転を体験した一般の人々のことである。彼らは、多くの場合身内で、スピリチズムを体験しながらも、その不思議な現象を説明することができず、不安にとらわれているのだ。すでにスピリチズムがロシアに輸



入されて10年以上の年月が経っている。こういった人の数は決して少なくはなかったはずだ<sup>(155)</sup>。こういった人々が、納得のいく説明を求めてメンデレーエフの講演会に足を運んだとしても不思議ではない。ところがそこで聞かされた「結論」は、霊媒をペテン師扱いしたものだ。当然、「真面目な信者」たちは、身内にペテン師がいるかのような、自分たちを侮辱するような、この「結論」を信じようとはしないだろう。「クレア（ママ）夫人はともかく、私は自分の家族なら知っている。我が家には手品をするものなどいはしない」と<sup>(156)</sup>。メンデレーエフは、聴衆を説得することにもまた、失敗したことになる。

このようにメンデレーエフの調査委員会は、「霊媒現象」を科学的に否定することはおろか、客観的に調査することにも、そして、一般大衆を説得し善導することにも失敗したことになる。「科学」は「迷信」に勝利しなかったのだ。とはいえ、方法論の当否や霊媒現象のタネ明かしをすることが本稿の目的ではない。ここではむしろ、この調査委員会の活動を含めてロシア・スピリチズム論争が当時の思想状況の中でいかなる役割を演じたかを以下、若干検証することにした。

本論の最初に指摘したように、近代スピリチズムがロシアに輸入され、流行し始めたのは「60年代」と呼ばれる時代、つまりクリミア戦争の敗戦を受けて大がかりな改革が近代化の方向で進められた時期に一致している。この時期、クリミア戦争の敗戦によって農奴制をはじめとするロシアの制度的旧弊の弊害が広く認識され、大規模かつ広範な国内改革が実施された<sup>(157)</sup>。農奴制は廃止され、また上からの工業化が推し進められた。社会が高度に組織化されるに従ってホワイトカラー層への需要が増大し、それともなって識字能力が普及した。これは出版界にとっては、潜在的な読者層の拡大となった。さらに1865年に発布された新しい出版規則は、一部の定期刊行物に対して事前検閲を免除するなど、ジャーナリズムにとっての追い風となった<sup>(158)</sup>。このようにしてロシアのジャーナリズムは拡大する読者層と政府の検閲政策の変化によって未曾有の活気を呈することとなった。この時期に定期刊行物は発行部数も、また種類も飛躍的に増大したのであった<sup>(159)</sup>。

調査委員会の動向が逐次マスコミに大々的に取り上げられたのは、近代スピリチズムが当時の大衆的読者層の新奇なものに対する興味に合致したテーマだったからだと説明できる。商業出版においては、読者が望む、あるいは望みそうなテーマが記事になるのだ。そもそもロシアの大衆にとって、近代スピリチズムは農奴改革以後の混乱したロシア社会において、多少いかがわしさがつきまとう、「気晴らし」にすぎなかった<sup>(160)</sup>。正教教会との間に深刻な対立も経験しなかった。既存の宗教との葛藤を経験した西洋の場合とは違って、ロシアにおけるスピリチズムは、あくまでも手品や見せ物と境界を接する娯楽の一種であり、家庭やサロンで催される降霊会における不可解な現象もまた、私的な領域に属していたのである。総じて、スピリチズムは新聞や雑誌といった「公の場」で論じられるべき話題ではなかった。本論で対象にしてきたスピリチズム論争は、その意味で「公の場」が転換したことを示す事件だった。従来、公開の場で論じられてこなかったことが、70年代という新たな時代に公開の場で語られるようになったからだ。

また、メンデレーエフの講演会からの収入の一部が「スラヴ慈善協会」を通じてスラヴ民族への義捐金になったことも時代を反映している。識字能力を備えたペテルブルクの大衆は、スピリチズムのタネ明かしを求めてメンデレーエフの講演会へと足を運び、そして自らの支払う入場料が汎スラヴ主義的な目的に使用されることを是認したのだった。

他方、クリミア戦争以後に急速にヨーロッパ社会との交渉が増えたロシア社会において、欧米と時を同じくして進行した近代スピリチズムの流行は、一種のグローバルゼーションの所産であったとも言える。そして霊媒現象を解明しようとしてメンデレーエフらが採用した近代科学という尺度もまた、当時のグローバルスタンダードであったと考えることができる。近代化に伴って西洋から流入した玉石混淆の事物のひとつとして、近代スピリチズムもまた、ロシア社会にもたらされたのであり、そして、近代スピリチズムという新奇の現象に対して、これを科学によって解明しようとした精神もまた、近代的な思惟の所産である。近代スピリチズム論争は、近代化・グローバル化が進行する当時のロシ

ア社会を象徴する出来事であった。思想史の側面から見たスピリチズム論争の重要性は、その結果にあるのではなく、その過程にあったのである。

## 注

- 1) エンゲルス『自然の弁証法』マルクス・エンゲルス全集、大月書店、1968年、第20巻、377ページ。
- 2) 「スピリチズム」は英語では Spiritualism、ロシア語では спиритизм と呼ばれ、日本語では降神術、神霊主義、心霊術などと訳されることがあるが、本稿ではロシア語の用法にならって「スピリチズム」と表記する。「スピリチズム」用語、および定義についてはブロックガウス百科事典を参照。См. В. С. Соловьев, “Спиритизм”, Энциклопедический словарь, Брокгаус и Ефрон. また、ここにあげた「スピリチズム」の派生的用法については、グラナート百科事典を参照。См. “Спиритизм”, Энциклопедический словарь Русского библиографического института Гранат. ここではこのほかにもテレパシーなど異常心理学の概念を表現する用語としての用法も記載されている。
- 3) 伝統的な Spiritualism (本稿の用語で「スピリチズム」と区別した概念として modern Spiritualist movement という概念を使用する研究者もいる。See, Maria Carlson, Fashionable Occultism, in *The Occult in Russian and Soviet culture*, edited by Bernice Glatzer, Cornell University 1997, p. 136.
- 4) Cf. Trevor H. Hall, “The Enigma of Daniel Home”, Prometheus Books, New York, 1984, pp. 28-29.
- 5) *ibid.*
- 6) 「プランシエット」、「ダイヤル・プレート」、「ウィジャー・ボード」に関しては、拙稿「近代スピリチズムとロシア—アレクサンドル二世の『コックリさん』—」、『文化と言語』2002年、第57号参照。

- 7) Daniel Dunglas Home : 彼自身は Home を「ヒューム」と発音していた。ヒュームについては伝記的文献がある。Home, Mme. Dunglas, “D. D. Home: His Life and Mission”, 1888, reprint ARNO PRESS, New York, 1976. Gordon Stein, “The Sorcerer of Kings”, Prometheus Books, New York, 1993, pp. 71-74. Trevor H. Hall, op. cit., p. 47. また、アレクサンドル二世宮中に現れた様子は、アンナ・チュツチェヴァの日記に詳しい。Анна Тютчева, “Воспоминания”, Москва, Захаров, 2000: Текст печатается по двухтомному изданию: А. Ф. Тютчева, “При дворе двух императоров”, Москва, 1928-29.
- 8) 近代スピリチズムとアレクサンドル二世、そして「コックリさん」に関しては、上記拙稿「近代スピリチズムとロシア」参照。トルストイとスピリチズムに関しては、『文明の果実』、トルストイ、中村白葉訳、河出書房新社、トルストイ全集 12、第 22 景、『アンナ・カレーリナ (下)』、トルストイ、中村融訳、第 7 編 22 章、岩波文庫、1989 年、352 ページ参照。ドストエフスキーとスピリチズムに関しては、中村健之介、『知られざるドストエフスキー』、第 8 章、岩波書店、1993 年参照。ソロヴィヨフとスピリチズムに関しては、御子柴道夫、『ソロヴィヨフとその時代』ソロヴィヨフ著作集別巻 1、刀水書房、1982 年、114-120 ページ参照。
- 9) 梶雅範『メンデレーエフの周期律表発見』、北海道大学図書刊行会 1997 年、26-30 ページ参照。
- 10) この委員会については、メンデレーエフ、そしてのちにアクサーコフによって資料集が出版されている。Д. И. Менделеев, “Материалы для суждения о СПИРИТИЗМЕ”, С-Пб. 1976. А. Н. Аксаков, “Разоблачения. История МЕДИУМИЧЕСКОЙ КОММИССИИ Физического общества при С.-Петербургском университете”, С-Пб, 1883. なお、本論を執筆するに当たって、東京工業大学の梶雅範氏からメンデレーエフの『資料集』の提供を受けた。この場を借りて感謝の意を表したい。Менделеев, “Материалы”, с. 351-352.

- 11) См. П. П. Ионид, “Мировоззрение Д. И. Менделеева”, АНСССР, М. 1959, с. 142.
- 12) Н. Вагнер, “Письмо к редактору”, *Вестник Европы*, 1875, кн. 4, с. 855-875.
- 13) См. А. Г. Дементьев, А. В. Западов, М. С. Черепанов ред. “Русская периодическая печать (1702-1894)”, Государственное издательство политической литературы, М. 1959, с. 470-472.
- 14) Вагнер, Николай Петрович (1829-1907) : Пенза県で生まれ、カザン大学などで教鞭を執った後にペテルブルク大学に移った動物学者。専門のほかにも『ネコのムルリツカ』などのおとぎ話の作家としても知られる。アクサーコフとともにスピリチズムのイデオログと目されている。スピリチズムを通じて作家のドストエフスキーとも交流があった。См. С. В. Белов, “Ф. М. Достоевский и его окружение”, Российская национальная библиотека, СПб, 2001, том 1, с. 130-131.
- 15) Sir William Crookes (1832-1919) : クルックス放電管や元素タリウムの発見などで知られる 19 世紀英国を代表する物理・化学者。スピリチズム研究に没頭。特に完全物質化現象に熱中し、霊媒フローレンス・クックとの仲はスキャンダルを呼び起こした。心霊現象に関する著作としては “Researches in the Phenomena of Spiritualism” London, 1874 などがある。クルックスについては、ジャネット・オッペンハイム著、和田芳久訳、『英国心霊主義の抬頭』工作舎、1992 年、参照。
- 16) Вагнер, “Письмо к редактору”, с. 855. А. М. Ботрофもまた Санкт・ペテルブルク大学の科学の教授。1861 年に分子構造の概念を導入して有機化合物の理論を確立しカザン大学からペテルブルク大学に移ってきた。71 年からペテルブルク科学アカデミー会員。ちなみにヴァグネルも昆虫の幼生生殖現象を同じく 1861 年に発見し、やはり同じくカザン大学からペテルブルク大学に移ってきた経歴を持つ。「スーパースター」霊媒ヒュームに関しては、See, Gordon Stein, op, cit., p. 14.

- 17) Аксаков, Александр Николаевич (1832-1903) : Пенза県で生まれ、官吏生活の傍らでジレットタント的に様々な研究をする。特にスウェデンボルクの神秘主義に影響を受けて、70年代にはロシアを代表するスピリチズムの唱道者となる。作家セルゲイ・アクサーコフの弟ニコライの息子に当たる。См. Сергей В. Сучков “Путешественник в царство духов А. Н. Аксаков”, вступ. ст. к кн. А. Н. Аксаков, “Анимизм и спиритизм”, изд. Аграф, 2001.
- 18) Вагнер, “Письмо к редактору”, с. 857. ちなみにブトレロフの娘ソフィーは、アクサーコフの妻となっている。См. Сучков, с. 13.
- 19) Вагнер, “Письмо к редактору”, с. 855.
- 20) Там же, с. 856.
- 21) Там же.
- 22) Там же, с. 856-857.
- 23) Там же, с. 857.
- 24) Там же, с. 858.
- 25) Там же.
- 26) Там же, с. 860.
- 27) Там же, с. 859.
- 28) Там же, с. 860.
- 29) Там же, с. 861-862.
- 30) Там же, с. 862.
- 31) Там же, с. 865.
- 32) Там же, с. 865.
- 33) Там же, с. 867.
- 34) Там же, с. 865.
- 35) Там же, с. 866.
- 36) Там же, с. 865.
- 37) Там же, с. 867.

- 38) Там же, с. 868.
- 39) Там же.
- 40) Там же, с. 868-872.
- 41) 現在でも、霊媒から発する「エクトプラズム」という「物質と非物質の中間のようなもの」によってこれらの現象を説明する説もあるが、霊媒現象の原因を詮索することは本稿の範囲を超えるのでここではそれに拘泥しない。三浦清宏「スピリチュアリズムと心霊研究」『明治大学人文科学研究 所紀要』第45冊1999年3月、94ページ参照。
- 42) Вагнер, “Письмо к редактору”, с. 872.
- 43) Там же, с. 874.
- 44) Рачинский, “По поводу спиритических сообщений г. Вагнера”, *Русский вестник*, 1875, май. Сергей Александрович (1836-?): 植物学者。モスクワ大学退職後、私塾を開き子供の教育に当たるなど、教育家として有名。См. Энциклопедический словарь, Брокгаус и Ефрон.
- 45) См. “Русская периодическая печать”, с. 340-343.
- 46) Рачинский, “По поводу спиритических сообщений г. Вагнера”, с. 381.
- 47) Там же, с. 380.
- 48) Там же, с. 381.
- 49) Там же.
- 50) Там же, с. 383.
- 51) Там же, с. 386.
- 52) Там же.
- 53) Там же, с. 392-396.
- 54) Там же, с. 397.
- 55) Там же, с. 398.
- 56) Там же, с. 389.

- 57) Там же, с. 398-399.
- 58) Там же, с. 399.
- 59) Менделеев, “Материалы”, с. 3-5. Аксаков, “Разоблачения”, с. 1-4.
- 60) Менделеев, с. 3. Аксаков, с. 1.
- 61) Менделеев, с. 4. Аксаков, с. 2.
- 62) Менделеев, с. 112.
- 63) Менделеев, с. 3. Аксаков, с. 1.
- 64) Там же.
- 65) Аксаков, с. 3.
- 66) Там же.
- 67) Менделеев, с. 6. Аксаков, с. 7.
- 68) Менделеев, с. 7. Аксаков, с. 8.
- 69) Менделеев, с. 8. Аксаков, с. 8.
- 70) Газ. *Голос*, 1875, 15 мая, № 137, с. 1; газ. *Новое время*, 1875, 20 мая, № 120, с. 3; газ. *С-Петербургские ведомости*, 1875, 20 мая, № 136, с. 2; *Пчела*, 1875, т. 1, 25 мая, с. 2; *Вестник Европы*, 1875, т. 3, кн. 6, с. 916-918. Чит. по кн. О. П. Каменоградская, “Дмитрий Иванович Менделеев. Библиографический указатель трудов”, АН СССР, 1978, с. 52.
- 71) “От редакции”, *Вестник Европы*, 1875, кн. 6, с. 916-918.
- 72) Аксаков, “Разоблачения”, с. 11.
- 73) Там же, с. 13-25.
- 74) Менделеев, “Материалы”, с. 10-11. Аксаков, “Разоблачения”, с. 27.
- 75) Менделеев, с. 30. Аксаков, с. 56.
- 76) Менделеев, с. 31. Аксаков, с. 56.
- 77) Аксаков, с. 57.



- 78) Каменоградская, с. 52.
- 79) Аксаков, “Письмо А. Н. Аксаков в «Биржевых Ведомостях», 10 ноября, 1875 г.”; он же, «Письмо А. Н. Аксакова в «Биржевых Ведомостях», 16 ноября, 1875”; Вагнер, “Письмо Н. П. Вагнер в «С.-Петербургских Ведомостях», 3 декабря, 1875 г.”. Чит. по кн. Аксакова, “Разоблачения”, с. 233-239.
- 80) Аксаков, “Разоблачения”, с. 69.
- 81) Менделеев, “Материалы”, с. 92.
- 82) Там же.
- 83) Аксаков, с. 241.
- 84) Там же, с. 240-241.
- 85) Там же, с. 69.
- 86) Там же, с. 70-73.
- 87) Каменоградская, с. 49-50.
- 88) Менделеев, с. 307.
- 89) Там же, с. 308.
- 90) Там же, с. 318.
- 91) ここでは霊媒ペッチ兄弟に関する第6－9回委員会の議事録が朗読された。 Там же, с. 319.
- 92) Там же, с. 314.
- 93) Там же, с. 319-320.
- 94) Аксаков, с. 74.
- 95) Там же, с. 76-77.
- 96) Там же, с. 81.
- 97) Там же, с. 78.
- 98) Менделеев, с. 38-40. Аксаков, с. 94-95.
- 99) Аксаков, с. 98.
- 100) Там же, с. 96-97.

- 101) Там же, с. 97-98.
- 102) Менделеев, с. 41. Аксаков, с. 118.
- 103) Менделеев, с. 44. Аксаков, с. 120.
- 104) Аксаков, с. 122-123.
- 105) Там же.
- 106) Там же, с. 134.
- 107) Там же, с. 179.
- 108) Менделеев, с. 48. Аксаков, с. 180.
- 109) Менделеев, с. 88-89. Аксаков, с. 182.
- 110) Менделеев, с. 137-138. Аксаков, с. 183-184.
- 111) Аксаков, с. 185.
- 112) Там же.
- 113) Там же, с. 138.
- 114) Там же, с. 138-146.
- 115) Там же, с. 146.
- 116) Там же, с. 147.
- 117) Менделеев, с. 51. Аксаков, с. 186.
- 118) Менделеев, с. 52-63. Аксаков, с. 187-226.
- 119) См. Каменоградская, с. 371
- 120) Менделеев, с. 322.
- 121) Там же, с. 323.
- 122) Там же, с. 323-324.
- 123) Там же, с. 324-325.
- 124) Там же, с. 326.
- 125) Там же, с. 331.
- 126) Там же, с. 325.
- 127) Там же, с. 331.
- 128) Там же, с. 332.

- 129) Там же, с. 332-333.
- 130) Там же, с. 335.
- 131) Там же, с. 336.
- 132) Там же, с. 335.
- 133) Там же, с. 340.
- 134) Там же.
- 135) スピリチズム否定の方法論の問題として、エンゲルスも唯物論の立場から「個々のいわゆる奇跡なるもののいずれもが反証されないかぎり、彼ら(霊媒)には十分の余地が残されている」と、同様の批判を展開している。エンゲルス『自然の弁証法』、マルクス エンゲルス全集、大月書店、1968年、20巻378ページ。
- 136) Менделеев, с. 351-352.
- 137) Там же, с. 341.
- 138) Там же, с. 342.
- 139) Аксаков, с. XX-XXI.
- 140) Менделеев, с. 80. Аксаков, с. 81.
- 141) Аксаков, с. XXII.
- 142) Там же.
- 143) Менделеев, с. 352.
- 144) Там же, с. 353-354.
- 145) Там же, с. 352.
- 146) Там же, с. 355.
- 147) Там же, с. 377.
- 148) Там же, с. 378. ちなみに、調査委員会の活動をまとめた『資料集』の売り上げは、高々度気象を観測するための気球購入の資金に充てられる予定だった。См. Менделеев, с. VIII-IX.
- 149) ドストエフスキーが問題にしたのは、調査委員会がスピリチズムを「笑いものにして、愚弄し、くすくす笑い」ながら、「こんなばかげたことに真

剣に掛かり合う羽目になったことに多少立腹」して調査する、というその「高邁な」態度だった。См. Ф. И. Достоевский, “Дневник писателя за 1876 год, апрель”, Полное собрание сочинений в тридцати томах, изд. Наука, Л. 1981, т. 22, с. 128.

150) См. там же, с. 100.

151) より婉曲に、彼は大衆を「説得」しようとしたのだ、と解釈する研究者もいる。Cf. Michael D. Gordin, “Loose and Baggy Spirits: Reading Dostoevskii and Mendeleev”, *Slavic Review* 60, winter, 2001, no. 4, p. 776.

152) Достоевский, там же.

153) Там же, с. 100-101.

154) Там же, с. 128-129.

155) ドストエフスキーの表現によれば、そういった人々は「モスクワでも、ペテルブルクでも、そしてロシアにおいても、十分というよりは過度といった方がいいぐらい、増えてきた」。Там же.

156) Там же.

157) 拙稿「クリミア戦争とゴルチャコフ外交—敗戦処理と大改革—」『法学新報』平成12年第107巻3・4号参照。

158) 大改革期における政府の検閲政策の変化については、拙稿「ゲルツェンの自由印刷所活動と政府の検閲政策」『ロシア史研究』1995年第56号、参照。

159) 拙稿「Ф. И. Чувчевと検閲改革—専制の擁護と言論の自由の問題によせて—」『スラヴ研究』1994年第41号、注42参照。

160) Анна Тютчева, “Воспоминания”, с. 324.

本稿は、平成15年度科学研究費補助金(課題番号15320035)研究成果の一部である。